

シルクロードを往来した人たち

ここでは、日本では語り知ることのできないシルクロードを往来した人物像をご紹介します。

それには、インド・中央アジアなど西方から中国へ渡来した人々、中国・朝鮮からインドなど西方へ行き、また帰来した人々、インド・中国・朝鮮などから日本に渡来した人々、日本から朝鮮・中国あるいはさらに西方へ渡り、また帰来した人々に分けることができるが、ここでは、前2者について述べよう。

まず、インド・中央アジアなど西方から中国へ渡来した人々についてご紹介しよう。

漢・唐や隋などの中国は、西域の文化や宗教をすすんで中国に招き入れようとした。しかし、西方の人たちはあまり中国に関心を払わなかった。なぜなら、北方には自分たちを脅かす存在があったからである。人物の往来という歴史の側面において、インドや中央アジアと中国との関係を見ると、それは決して対等平等ではない。中国の人が西に向かうとき、そこには明確な意図がある。政府の使節とか、赴任する役人、軍隊、それに仏教僧たちの求法の旅といったように、大なり小なりそこには積極性がある。これにたいして西からのアプローチはほとんどない。西方の国々の中国に対する意識はきわめて低いものであった。

インドや中央アジアから中国へ向かう人の動きには、積極的な意志をもって行く人は少ない。それは中国の政権と周囲の政権との間の婚姻にまつわる場合や中国の王朝に対して朝貢という形をとって遠距離貿易を行う場合などを除くと、ほとんどそのような意志は存在しなかったといっても過言ではない。中国にかかわらざるを得なかった中央アジアの国々と遠隔の中央アジアとはかかわり方が大きく異なっていたということも容易に想定できる。

インドの場合はこのうちの後者に当てはまるだろうが、さらに中央アジアの場合とも異なっていたはずである。しかし、それは程度の差であり、中国側の働きかけにくらべれば、動きはいたって小さい。

中国にたいする人の動きのうちでもっとも顕著にあらわれたのは、中央アジアやインドからわたった仏教の僧たちである。中国にインドや中央アジアの思想をはじめとする諸文化をもたらし、それが中国固有の文化によって咀嚼されたという点で、インドの仏僧の動きは漢や唐の中国にはかりしれないほど大きな意味を与えているが、そのような仏僧たちでも中国を意識して往来したものではなかったろう。その仏僧たちの手記のなかで、自分たちは中国に仏教を広めるために行った、というくだりがあるが、それは中国側があとづけで書いたものであろう。はじめからそのつもりで中国に行ったという僧はおそらく皆無に近い。そうではなく、ブッダバドラ（仏陀祓陀羅）とかパラマールタ（真諦）のように中国側から直接ないし間接に依頼されたとか、クーマラジーヴァ（鳩摩羅什）のように政治勢力に拉致されて中国に到達したとか、あるいはクーマラジーヴァのような優れた僧を追って、しまいには中国に至ったとか、実状はさまざまであった。

このように理解していくうえで、そのような情報の源はほとんどが中国側だけからのものであるということである。記録をよく残す中国とほとんど残さないインドという違いがあるとしても、それは決定的なことであった。

極端にいえば、インドやとくに中央アジア諸国では、中国を意識していなかったということ、つまり中国と西の諸国とでは双方を認識する程度においてまったく異なっていたということである。彼らがいつも日常のこととして対処を迫られていたことは、中国のことではなく、北側にいる遊牧民族の動きである。この遊牧民族の存在がインドや中央アジア諸国が中国に行くひとが少ないという事情を説明しているのである。インドや中央アジアが中国に対して働きかけたのではなく、中国側が中国の西方の地域、すなわち西域に対して積極性を持っていたのである。しかもその中国は、直接、西方に接触したのではなく、遊牧民族とのかかわりの中から西の地域を認識し始めている。このようなわけで、中国側だけにしか存在しない記録だけを頼りにして、インドや中央アジアからのひとの動きを眺めることには大きな制約がある。

そのようななかから見えてくることは、中国にわたった仏僧たちのことである。

4世紀のはじめまでは中国に向かう仏僧の動きはきわめて小さい。西から中国にわたったのは、安西高のように安という姓のつくひとが5人、康僧会のように康のつくひとが4人、支謙のように、支のつくひとが7人、クチャ（亀茲）に人がひとり、竺法蘭のように、竺のつく人が9人、最域の人ということだけが分かって出身地不明が4人である。ふつう、安・康・支は中央アジアのバルティア・サマルカンド・トハラ出身者にそれぞれ冠せられた名前だといわれる。竺とは天竺（インド）の出身である。したがって中央アジアから17人、インドから9人を数えることができる。しかし、中央アジア出身をいう人たちを字義のとおり受け取って、中央アジアから直接、中国へ動いた人たちだと見ることはできない。2、3世紀に中央アジアのそんなオアシス都市で仏教の理論が盛んだった証拠はないからである。もっとのちのトハラはともかくとしてソグド地方では仏教は受け入れられていない。こういった人たちの時代に仏教がすでに盛んだったのはガンダーラである。ガンダーラでは1世紀には仏教の寺院があり、仏教が根づいていた。いったん、ガンダーラで仏教を学んでから中国に行きついたらとしか考えられない。

4世紀中葉から5世紀になると、中央アジア出身といわれるひとがいったんに減る。康のつく人は1人、支のつく人は2人、クチャ出身は1人、中央アジアのひととわかるだけの人は4人、合計8人である。これに対してインドの人は急増して28人にのぼる。中国のインド求法僧は96人と激増して仏僧の往来にひとつの画期をみせる。中国僧として3世紀はじめて西に赴いた朱士行の行った先はホータンであったから、中央アジアといってもオアミールに東のホータンやクチャ付近に仏教がすでに普及していたことも、出土したインド文字の仏典から分かっている。パミールに西の都市国家出身僧がこういった場所で仏教を学んだ可能性はあるものの、中国からのインド求法が急激に増加したことにより、実際にガンダーラの東側や南側の仏教の諸事象が現実のものとして把握できるようになった。その理解の中に、従来中国にわたった中央アジア僧というものの実態もあったはずである。出身はパミールの西ながら、仏教を学んだのはガンダーラである、という事実が判明するようになったといえよう。したがって、出身を聞けば、従来は中央アジアのどこそこであるということで、パルチア僧とか月氏の僧としてくくったけれども、実は中央アジア各地からインド（ガンダーラ）へ行って勉強し、さらに各地を転々として、ついに中国の境域に達したひとたちであったという理解に変わったのである。

こういったインド僧の動き方を見ると、ガンダーラからどういうルートをたどったかが

はっきりしてくる。4世紀のインド僧でその伝記が残され、しかもルートの分かる限りでは、例外なく、カラコルム道に北上していく。ガンダーラの北はいにしへのウディヤーナ、スワード河の上流域である。ガンダーラと同じ文化圏である。そこから東へ山を越えてインダス上流の深い溪谷沿いの道に出る。古く漢代に「懸度」とよばれたもっとも難渋する道がつづく。いにしへのダレルとかダラダといわれ、人高二倍で木造の弥勒大仏があった地にいた。近年の調査でこのあたりの山崖に仏・ストゥーバの線刻画が発見され、インドの各地からガンダーラに到ってここまでやってきた僧たちの名前がたくさん彫りこまれていることが判った。そのなかには北魏の使節の名もあった。ダレルから河沿いに今のギルギットあたり、いにしへのボロルにいた。ここからいくつかの峠でヒンドゥークシュの東脈を越えるといまのワハーンに出、葱嶺（パミール）の山頂にあるといわれた今の新疆ウイグル自治区の南西端タシュクルガンに到達する。それからカシュガルに北上すれば、クチャは必ずルート上にあり、いまのカラシャフルからトルファン、あるいはやや時代が早ければカラシャフルからクロライナ（楼蘭）にいて、玉門関に至る。また、タシュクルガンからヤルカンドに東行すると、ホータンに出て、アルティン山脈を右手に遠望しつつクロライナに行くか、そのまま敦煌に行くかであり、山脈を越えてツァイダム盆地に入り、青海の南をまわって蘭州に行くのは、河西回廊を通らないルートである。

時代が下って6～7世紀になると、天山の北からモンゴリアにいた遊牧民族の領域を経た仏僧も多い。そのころのガンダーラは凋落してずっと西のカーピシーがガンダーラの地位を引き継いでいたから、僧たちのルートもそこを使い、ヒンドゥークシュの西脈バーミーヤーンを経て、トハリスターンに行き、東へ進んでワハーンで古くからのルートに乗った。このときバーミーヤーン道がもっぱら活況を呈したが、どちらの時代にもルート上の山中の交通の中継ぎ地点に、大仏があった。カラコルム道の大仏は、これが建立されてから仏教が東へと広まったなどという言い伝えがあった。

陸路にはこのほか、7世紀になると、いまの北インドからネパールやチベットを経由するルートもあったが、唐の義浄のように中国からインドへ渡った人もいるように、海路も陸路とは別な意味で重要なルートであった。海路はおそらく紀元前後からペルシア南岸と南インドとを結んでいた。それがさらに東へ及んだのは3世紀から4世紀にかけてである。中国では南の廣州や北の山東半島が南海に開かれているが、インドではガンガー河河口や南東沿岸、そしてスリランカが海港であった。そこからいずれもジャワ島の北側に沿ってマレイ半島をまわった。このルートが僧たちの伝記に現れるのはやはり4世紀になってからであるが、この海路を使って中国にわたった僧たちの多くがまたガンダーラ出身者であった。

いろいろな種類の人たちが中国へ来訪したことは事実である。やってきてそのまま居ついたひと、そこで代々居住してしまったひと、短期の滞在のあとにふたたび戻っていったひと、かかわり方もさまざまであった。その人たちによって実際にインドや中央アジアの文化が、目に見えるものも見えないものも届き、そこで取捨選択が行われて、中国の文化形成に役割を果たしたのである。しかし一方の中央アジアやインドでは、中国文明の余滴すら受け止めた証拠はないといってよいのである。

では、中国・朝鮮から中央アジアやインドなど西方へ行き、また帰来した人々に話を進

めてみよう。

その前に、この項を論じる前に数千年前から中国に厳然としてある、中華思想について考えてみよう。この中華思想を踏まえてこの項を考えないと、正しい理解につながらないと思う。

数千年前から使われてきた“東夷（とうい）・南蛮（なんばん）・西戎（せいじゅう）・北狄（ほくてき）”という言葉の意味は、この世の中心に中華民族が存在しており、中原（その昔、漢民族が支配していた地域。ほぼ黄土高原そのままの地域に当てはまる）周縁の諸民族は犬やケモノや虫のような野蛮だと表現する言葉なのである。中原の東の端からさらに東海の果てにある我が日本民族も、光栄にも「東夷」（漢国土の東にいる野蛮人）の称号を戴いているのである。

その辺のところを正確に記述して見よう。

東夷（とうい）・南蛮（なんばん）・北狄（ほくてき）、西羌（せいきょう）一の「四夷」のうち、もっとも早く漢人文化に同化したのは、今日の江蘇省、低い湿地帯に住んでいた東夷である。夷とは、大の字型に立った人のわきに、小さく人という字を添えた文字で、背たけの低い小柄な民族を表している。魯公伯禽（はくきん）が東夷・淮夷（わいい、淮水流域にいた原住民）・徐夷（今の徐州あたりにいた）などを討った。徐夷は退いて播陽湖のあたりに移った。また西周の穆王や東周の宣王が南征して荆蛮（けいばん）を退けた。それによって漢人文化圏は広く華中をおおい、やがて長江の流域までひろがった。しかし北狄（犬戎・けんじゅう）と西羌（羌戎）とは、いずれも遊牧の民であって、肉、乳製品、皮革には事欠かないが、穀物と衣類を自ら生産することができない。彼らはつとに西周の鎬京（こうけい）を攻め、西周の幽王を馬麗山（りざん、今日の西安市東 20 キロ、華清池離宮の山）に攻め殺したため、紀元前 770 年、周は都を洛陽に移して、「東周」と呼ばれるようになった。中国史の上で、紀元がはっきりするのはこれからあとである。しかし遊牧民たちは、洛陽近郊の伊水や洛水のほとりまで進出して洛陽の都をおびやかす。東周王朝は、諸侯の力を借りて、防戦に努めるありさまとなった。周の東遷のあと、今日の陝西省に興った（おこ）秦は、北の犬戎を抑えつつ、比較的弱い羌族をしきりに西へ西へと圧迫して、羌戎を黄河上流の山地高原に追い払った。この西羌は、中古の吐蕃およびタンゲート（党項）、すなわち今日のチベット族の元祖である。また、犬戎は秦・漢のころ、大きな騎馬民族国家を形成して「匈奴」と呼ばれた人びとの祖先である。

それに対して南方はどうであったか。いわゆる「蛮」のうちの荆蛮は、東周のころ漢民族文化に同化しつつ、今日の湖北省と湖南省の大半を領有する楚の国を建てた。しかし、北方文化になじみにくい荆蛮の一部は南中国の山間に退いて、今日の苗（ミャオ）族となり、農耕に長じた人たちは、亜熱帯の山地にいで、今日の広西省壮（チュアン）族の源流となった。また、南蛮のうち越（えつ）族は、今日の太湖以南の浙江省において、約 6 千年も前から米を作り、魚介を漁り、草ぶきの家に住んでいた原住民である。彼らは徐夷や淮夷を併せて、一時は長江下流に覇を唱え、呉や楚と張り合ったが、秦・漢のころには分裂して「百越」と呼ばれた。その主力は福建・広東両省に南下して、紀元前 2、3 世紀には広州に南越王国を建て、その勢力は交趾（こうち）シナに及んだ。しかし漢の武帝によって広州の都を奪われてのち、彼らはトンキンデルタの原住民と混血して、今日の越南（ベトナム）

人の元祖となった。また、華南山地に残った越族は今日の傜族（ヤオ）や余由（ショオ）族の元祖となった。

（NHK取材班 写真集 シルクロード1・2・3 解説・長澤和俊氏）より。

中国では昔から、北方や西方の民族を「胡」といつていたが、その中国でさえ現在では「胡」という言葉と字は蔑称であるから使わないことになりつつある。いわく、「胡座（あぐら）」、「胡椒」などの言葉があるが、すでに死語になっている。因みに「胡」という言葉は、匈奴の「匈」が「ホン」という発音になるが、それを略して胡＝ホ、といった。

日本人も最大人口の漢族が「少数民族」という言葉が無意識につかうので、それを鵜呑みにして少数民族といっている。ウイグルやカザフなどの諸民族からいわせれば、「それは人口の多い中国人（漢民族）が、勝手に自分たちより数の少ない民族のことを言っているのであって、私たちは決して自分たちを少数民族だとは思っていない。私たちの正式の民族名を使えばいいだけの話だ。彼らが私たちを支配するために都合のいい言葉だから使うのだろう」と、いわれた。“その通りだ”といたく感じ入ったものである。

史上初の“シルクロード” 張騫

だいぶ、わき道に入ってしまった。話を本来の「絲綢之路」にもどそう。

シルクロードを往来した人で、だれでもが容易に名を挙げることのできる人といえば、なんといっても張騫（ちょうけん）の名を挙げることができるだろう。

シルクロードを往来した名も知れぬひとたちの先駆者としての張騫は、そのひとたちの偉業すべてを背負うことのできる人物といえる。

まず先に、張騫をご紹介しておこう。

武帝が即位する以前、長安のはるか西、河西回廊の敦煌あたりに月氏という国があった。月氏は交易によって栄えていたが、匈奴との戦いに敗れ敦煌を追われて、さらに西へと落ちのびた。

匈奴は月氏の王を殺し、その王の頭蓋骨を飲器としたので、月氏は匈奴を憎み復讐を誓っているとのうわさを聞いた武帝は、匈奴を挟み撃ちにするために月氏との同盟を考えた。しかし月氏は匈奴の支配下の領土をこえたそのまた向こう側にいたのである。命をかけた旅になるのは明らかだった。誰か砂漠を渡って月氏にあい、共に匈奴を打つべく説得するものはいないか、との求めに応えたのが、張騫であった。

侍従という低い身分ではあったが、張騫は紀元前 139 年、100 人あまりの従者と案内役の匈奴の奴隸、甘父（かんぼ）とともに長安を旅立った。張騫は一路西へ、現在は河西回廊と呼ばれる砂漠の道を進んでいった。しかし、道半ばにして一行は匈奴兵にとらわれてしまった。張騫は匈奴の単于の前に引き出されると、匈奴を撃つため月氏のもとに行くことを隠さずに述べた。その率直さゆえか、単于は張騫を殺さずに 10 年余りを匈奴と共に砂漠と草原を移動して過ごした。その間に妻も与えられ子どもまでなした。さまざまな艱難辛苦を乗り越えて、たどり着いた月氏はすでに平和な日々を送っており、今さら強大な武力を持つ匈奴と戦う意思は持ち合わせていなかった。

その張騫のもたらした情報に「西方の大宛（現在のフェルガーナ地方）には血を流す汗血馬がいる」とあった。この馬が大宛の武帝（じし）城に隠してあると知った武帝は、どうしてもそれがほしくなった。

こうして汗血馬獲得のための大遠征軍が起こされた。その司令官が李広利である。一度破れた李將軍は帰国を許されず、再度、大宛を攻めて勝利したが、わずかに数十頭の汗血馬を得ただけであった。そのとき、李陵という將軍が別働隊を率いて参加していたが、5千の別働隊の軍に10万の匈奴が取り囲み奮戦したが、むなしく捕虜となった。その李陵の善戦を評価して、武帝の怒りを解きほぐそうとしたのが『史記』を書いた司馬遷であった。だが怒りの解けない武帝は、司馬遷を宮刑に処した。宮刑とは男性の一物を取り除くという刑であり、宦官はみなそうであった。司馬遷は李陵を誉めて李広利を批判することによって、武帝の戦争政策を批判したのである。

張騫の2度にわたる西域旅行は、武帝の数ある対外活動の中でも最大の歴史的意義をもつ事業であるといえよう。「鑿空の攻（さくくうのこう）」と称せられる交通路の開拓によって、中国と西方諸国との接近がはじまり、以後、双方の使節や商人の往来が頻繁となった。こうして、それぞれ異なった条件のもとに発達した諸文明は、互いに影響を及ぼしあったが、とくに目立つのは物資の交流である。西方からは葡萄、柘榴（ざくろ）、ウマゴヤシ、クルミ、アラビア馬のほか、音楽、曲技、工芸品などがもたらされ、中国からは絹織物と黄金が輸出された。柘榴やクルミは医薬品であった。絹は中央アジアから西アジアを経て遠くローマまで運ばれ、そのルートは後世、シルクロードと名付けられるが、東アジアとヨーロッパを結ぶこの交通路を開いたのは張騫であり、彼の功績は武帝の名とともに永く記憶されて然るべきであろう。やがて仏教をはじめとする西方の宗教、思想、技術が伝えられたのもこのルートであった。

甘父もご紹介しなければ正しくない。

甘父（かんぽ）のちに堂邑父

張騫の従者。奴隸の出身といわれ漢人の堂邑氏の奴隸となっていた。前139年ころ、張騫に従って中央アジアに出発。往路・復路とも匈奴に捕らえられたが、降伏せず漢の節を守り通した。前126年ころ、匈奴の単于位をめぐる内紛の間隙を突いて、張騫とともに逃亡し帰国。中央アジア地方の貴重な情報をもたらした。漢はこの功を認め、奴隸出身から解放するとともに堂邑の姓を与え、特に設けた奉使君に任じた。

それにしても張騫・甘父主従に同行した100人はいわずもがな、シルクロードの歴史に彩りを添えた人々の視野は広い。『史記』大宛伝に

はじめて酒泉郡を置き、以て西北の国ぐにと通ず。因って益（ます）ます使いを發し、安息（パルティア）・奄蔡（アース）・黎軒（アレクサンドリア）・条支（シリア）・身毒（インド）に抵（いた）らしむ。而して天子（武帝）は宛（フェルガナ）の馬を好み、使者は道に相い望めり。諸もろの外国に使いするも一輩（グループ）の大なるものは数百、少なきものも百余人。（中略）率（おおむ）ね一歳中に使いの多きとしは十余、少なきとしは五・六輩。遠きものは八・九輩、近きものは数歳にして反（かえ）る。

と記しており、張騫の遠征に刺激されて帰属してきた西域諸国が、中国側の輜重の調達や道案内のために恐慌をきたすほど施設派遣が頻繁に行われたという。当然、一攫千金を夢みた商人たちも足しげく西方へ旅立って行ったに違いないが、彼らは仄かに陰影を残すのみである。

数百年後、751年つまり唐の玄宗皇帝の天宝10年、高句麗出身の高仙芝将軍に率いられた唐軍は、西域救援に乗り出してきたイスラム軍とタラス川河畔に戦って大敗北を喫した。このとき、イスラム軍に捕らえられた紙漉工がおり、彼によって製紙技術が西方へ伝わったというのはあまりにも有名な話であるが、張騫の従者たちのほとんどが僧であったように、かくも世界の歴史を動かした紙漉工でさえその名は記録にとどめられず、見捨てられてしまったわけである。

ところが同じ捕虜の身でありながら、成立して間もないアッバース朝のクーファに連行された杜環は、各地を遍歴したあげく、海路、スリランカ経由で故国に向かい、762年に広州へ帰還することができた。彼は都の長安に戻ると西アジア各地での見聞を『経行記』にまとめあげた。この旅行記は散逸して残っていないが、たまたま彼の一族であり、名著『痛典』の撰者である杜佑が、その一部分を採録したおかげで歴史に名を残すことができた。紙漉工と杜環、この二人の差は知識人か否かを除けば、まったくの偶然とほんの僅かな幸運との違いに帰せられそうである。

杜環はクーファあたりに中国人の機織工や金銀細工職人、画家たちがいたと伝えている。地味ではあるが逞しく、しかも着実で執拗な文化交流に担い手を見出す思いがするが、彼ら名もなき人びとこそシルクロードの主役たちとして記憶されるべきなのである。

さて、全体的に見て使節、将軍、和蕃公主などに区分けされる他のメンバーも、年代順に配列してみると、普通の人名辞典では明らかにされない、いくつかの特色があることが分かる。そのひとつは、シルクロードの往来に大小の波があり、波それぞれが中国王朝の消長、換言すれば周辺民族の興亡と密接なかかわりを持っているということである。

第1波は、漢と匈奴の激突を中心にした前2世紀から前1世紀にかけての武帝時代であり、張騫の遠征を含めたシルクロード史上のエポックメイキングとなった時期である。

第2波は、1世紀から2世紀中ごろにかけて、西域都護、とりわけ班超・班勇父子が西域経営や各地への遠征で活躍する時代が中心となっており、それは僧たちの西域求法による仏法将来という、仏法初伝説話が生まれても、あながち不思議ではない雰囲気や時代背景として持っている。

第3波は、5世紀後半から6世紀前半、北魏の統一と柔然の勢力伸張、さらに南朝との対立、突厥の興起へ続く時代にあたり、虚々実々の外交戦が展開され、西域への使節派遣が増加した。また伊吾、鄯善、敦煌さらに酒泉にまで植民地を作り、東西貿易を独占した当時のソグド人の活躍が、こうした形勢に刺激を与えたことも見逃せない。北魏太武帝が統一を果たすとすぐ、行人の王恩生や許網を西域に派遣し、彼らが失敗すると重ねて薫琬・高明を遣わしたのもそのためであった。この時期の特色は、政略結婚が多いことである。柔然に迎えられた西海公主、突厥に嫁いだ長楽公主そして悲劇の公主として名高い、匈奴に嫁いだ漢の王昭君くらい、この時代に集中して現れているのは興味深い。また注目に値するのは中国僧による西域行が急増していることであろう。

第4波は7世紀、隋より唐初にわたる時代である。隋の南北統一は突厥問題を含め、煬

帝の積極外交に拍車をかけることになった。605年、河西に派遣された役人が、西域の商人たちに長安・洛陽へ赴くよう勧誘した話は有名であるが、煬帝は即位するとすぐ諸国に使節を送り、朝貢を促している。

唐太宗も突厥をはじめとするさまざまな外交的難問を解決し、諸国の首長たちから天可汗（テングリ・カガン）の称号を受けるなど、積極外交を展開した。王玄策らの覇権にみられる中印交渉が大々的に行われたのも勢いの赴くところであり、これに玄奘の偉業が重ねられ、西域に対する関心はいやがうえにも高まることになる。そのひとりが義浄であるが、彼の『大唐西域求法高僧伝』に著され永遠の生命を与えられた求法僧たちを通じて、当時の陸のシルクロードと海のシルクロードの盛況ぶりがうかがえる。なかでもヒマラヤ越えがことのほか利用された点に驚きさえ感じる。

第5波は8世紀である。玄宗の治世を中心として、対外政策の複雑化を物語るかのように、西域諸国をはじめ新羅、突厥などの常連に加え、吐蕃、渤海、さらに契丹といった新興国との多彩な交流が進行する。しかし安祿山による安史の乱後は東方が渤海、契丹、新羅と変わらないのにくらべ、西方では西域諸国の名が稀になり、吐蕃や回紇に閉められるようになるのは、すでにシルクロードへの唐の門戸が、ほぼ塞がれてしまったことを裏づけているように思われる。

最後に、日本部とも密接に関連するが、中国と朝鮮半島との交渉に触れてみると、南北朝時代では南朝と百済・新羅の間に若干認められている程度であるのに対し、隋唐時代に入ってから様相が一変して、百済・新羅双方とも毎年のように使節を派遣している。ただ高句麗の派遣が極端に少ないのは、隋唐両朝との関係悪化のためとみられ、その影響が三国鼎立して争う朝鮮半島の政情や中国との使節往来にまで及んだものと考えられる。唐高宗の遠征によって百済・高句麗が相次いで滅亡、まもなく新羅の統一が実現し、唐との新たな関係が樹立されることになる。時あたかも渤海建国があり、渤海が唐文化の摂取につとめ、またわが国との交流も緊密の度を深めたことはよく知られている。それは中国より迂回し渤海を経由するというシルクロードの出現といえる。